

# ザ・タイガース 44年後の音

国際日本文化研究センター准教授 磯前 順一

拙著「ザ・タイガース 世界はボクを待っていた」(集英社)を脱稿後、私は昨年12月3日のタイガースの武道館コンサートのオープニング・アクトを待たずして、ドイツに出発した。そこでの仕事を終えた2カ月後、震災の復興景気で賑わう仙台でザ・タイガースのコンサートを見るために、日本へと戻ってきた。2013年の「ザ・タイガース・ツアー」は、12年の沢田研二ツアーに不参加であったリード・ギターの加橋かつみも加わり、オリジナル・メンバーの5人が全員揃ったことになった。1969年3月5日の加橋脱退から、実に44年ぶりのことである。

今回のツアーを招集した沢田研二は、各メンバーに、「これまでどのように各人が生きて来たのか、それぞれの人生をステージの音として現れるようにしてほしい」と、要望を出した。その思いに応えるように、瞳みくろは「音にはその人の生き様が出る」「タイガース解散後、自分が音楽の世界でどれだけ懸命に生きてきたかを、ファンに伝えてほしい」と、仙台の楽屋で筆者に語った。

## 論・談

### 自分の生き様を音で表現

—生きてゆくのに不安で切なくて辛い時代に—

40年の歳月の間、瞳がどのように生きて来たかを示す唯一無二の機会であり、音を通して彼からのメッセージとなるからだ。かつてリーダーの岸部一徳は「ぼくたちはきれいな大人になりたい」と、タイガースの音楽を頭ごなしに否定する大人たちに怒りをぶつけた。それが今回のコンサートで、60代半ばになった彼らメンバーたちに返ってくる言葉にもなる。44年後に自分らがどんな大人になったのか、彼らはそれを、自分たちの音を通して示そうというつもりなのだ。

そして、メンバーが取った和解の方法は、岸部や森本太郎の言うように「音楽少年」の気持ちに戻ることであった。それは今回の音楽のナンバーとして選ばれた曲が、「サティスファクション」のように、タイガースの前身、大阪のジャズ喫茶で活躍していたファニース時代に得意としていた初期のローリング・ストーンズのものであったことに表れている。

初めてファンの前で披露された。それはメンバーがグループ内の葛藤に苦しんだあの時期から目をそむける「ごめん」、当時の葛藤に音で向き合おうとする意思表示のようにも感じられた。タイガースにとって、5人の関係が損なわれた69年3月5日は、悲しい思い出ではあっても、やはり忘れてはならない特別な日なのだ。私にとって、今回一番心に残る曲となった。コンサートで、沢田は「これから先、生きてゆくのにどうも不安で切なくて、辛い時代なのに、こうしてタイガースに光を当てて

今回のツアーでは、時おり沢田がMC(しゃべり)で「今地震が」とファンの笑いを誘ったように、演奏のバランスを崩す場面もしばしばあった。そうしたメンバー間の演奏に齟齬を感じられることも、ツアーの序盤にはファンのブロンで指摘された。それは瞳も言うように、加橋脱退からの44年という歳月の間に、5人のメンバーがそれぞれどのような人生を過ごしてきたのか、その生き方の違いを示すものでもあるのだ。

皇制ナショナリズムのもたらす国民の均質化へと率先して身を投じていく光景は、かつての日本社会が経験した最も苦しい歴史の「軸」と重なっている。

過去の自分の傷を恐れる人間は、いたすりに過去を美化し、ナルシステックな郷愁に耽溺することになる。傷ついた過去の自分の姿を肯定的に受容できるから、人間は未来に向かって前向きに生きることが出来る。そういって意味でも今回のツアーは、震災後、戦後社会の価値観を支えて来た高度経済成長という理念を相対化する動きがある一方で、その不安ゆえに高度経済成長へのノスタルジアにどっぷりつかれた現在の日本社会に対して、一石を投じるものともなる



オリジナルメンバーのタイガース (©「明星」)

初めは「ファンの前で披露された。それはメンバーがグループ内の葛藤に苦しんだあの時期から目をそむける「ごめん」、当時の葛藤に音で向き合おうとする意思表示のようにも感じられた。タイガースにとって、5人の関係が損なわれた69年3月5日は、悲しい思い出ではあっても、やはり忘れてはならない特別な日なのだ。私にとって、今回一番心に残る曲となった。コンサートで、沢田は「これから先、生きてゆくのにどうも不安で切なくて、辛い時代なのに、こうしてタイガースに光を当てて

補記 本稿は、タイガースの瞳みくろ氏、及び同ファンの山田美枝子氏への取材をふまえて書かれたものである。阿氏に感謝の意を表したい。